

ロドリゲス『日本大文典』における“sonsonete” —濁音前鼻音記述をめぐる—

山田昇平

1. はじめに

本稿ではロドリゲス『日本大文典』に使用されるポルトガル語“sonsonete”について、検討を加える。この語は同書の中で、中世末期日本語の濁音前鼻音に関する記述にみられる。この記述は日本語音韻史において重要な位置を占めるもので、“sonsonete”はこの記述全体の解釈に関わる語であるが、後に触れる通り、“sonsonete”の解釈は、先行研究において一致した見解で理解されているとは言い難い状況にある。この語の理解は、日本語音韻史の重要資料の解釈に関わるもので、慎重かつ正確に検討を行う必要がある。

本稿では上記の問題意識に基づき、“sonsonete”について、キリシタン・ローマ字資料における用例を元に共時的な解釈を加える。その上で、“sonsonete”が用いられる濁音前鼻音記述について、改めて解釈を下す。そして、中世末期におけるキリシタン宣教師が濁音前鼻音をどのような音として捉えたのかを明らかにすることを目的とする。

2. 問題の焦点

2-1. 濁音前鼻音記述の“sonsonete”

ロドリゲス『日本大文典』には中世末期日本語の濁音の前に軽微な鼻音が伴っていたことを窺わせる記述が見られる。

- (1) Toda a vogal, antes de, D, Dz, G, sempre se pronuncia como com hum meyo til, ou sonsonete que se forma dentro dos narizes o qual toca algum tanto no til. Vt, Māda, mīdō, mádoi, nādame, nādete, nīdo, mādzu, āgiuai, águru, ágaqu, cága, fanafáda, fágama, &c.

Esta mesma regra goarda algūas vezes, A, vogal antes de, B, mormente quando se duplica, & se muda o, F, em, B, mas isto nam he geral. Vt, Mairi sorofaba.

(177 丁裏—178 丁表)

この個所は現在最も普及している、土井忠生氏の訳版では次の通りに訳される。

- (1) OD, Dz, G の前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音か ソンソネーテ を伴ってゐるやうに発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持つてゐる発音なのである。例へば、Māda (未だ)、Mīdō (御堂)、mádoi (惑ひ)、nādame (宥め)、nādete (撫でて)、nīdo (二度)、mādzu (先づ)、āgiuai (味はひ)、águru (上ぐる)、ágaqu (足掻く)、cága (加賀)、fanafáda (甚だ)、fágama (羽釜)、など。

○この法則は、ある場合に B の前の母音 A を支配することがある。それは *Mairisorofaba* (参りそろはば) のやうに、主として F が重複して、その F が B になる場合であるが、一般的なものではない。(p.637)

この記述は、中世末期の日本語のガ行ダ行の濁音に軽微な鼻音(濁音前鼻音)が前接していたことを知らせる、日本語音韻史上における重要な記述である。この内で、濁音前鼻音を表現するのに、“*sonsonete*”(ソソソネーテ)という語が用いられているのが注目される。この他、同書の濁音前鼻音に関する記述は次の二例(土井訳も共に載せる)。

(2) *No pronũciacas as vogais, antes de, g, que se pronunciam cõ hũ meio til, os de Bijẽ, o deixam, & pronunciam secamẽte. Vt, Em lugar de, Tõga, dizẽ, Toga, Soregaxi, &c. E por esta pronunciaçam sam conhecidos os de Bijen.* (170 丁裏)

(2)' O g の前の母音は半分の鼻音を以て発音するのであるが、‘備前’(Bijẽ)のものの発音ではそれを除いてみて、干からびた発音をする。例へば、Tõga(科)の代りに Toga(とが)、Soregaxi(某)などといふ。この発音をするので‘備前’(Bijen)の者は有名である。(p.612)

(3) *Item em lugar de hum meio til, ou sonsonete que requerem algũas palauras como se dira auante no modo de pronunciar, nam se ponha, N, ou til distinto. Vt, por, Tõga, Varerãga, Nãgasaqui, dizer, Tonga, Vareranga, Nangasaqui, &c.* (172 丁裏)

(3)' 又、後に発音法の章で述べるやうに、ある語は一種半分の鼻音或いはソソソネーテをとるのであるが、それを N 又は明白な鼻音に変へてはならない。例へば、Tõga(科)、Varerãga(われらが)、Nãgasaqui(長崎)の代りに Tonga(とんが)、Vareranga(われらんが)、Nangasaqui(なんがさき)といふなど。(p.620)

(2) では、‘備前のもの’が濁子音 g の前の「半分の」鼻音乃至鼻音符号“*meio til*”を伴った発音をしない旨を述べており、方言における濁音前鼻音の状況が窺える。(3) はある語が伴うべき「半分の鼻音」“*meio til*”を「明白な鼻音に変へてはならない」とする。この鼻音は用例から濁音前鼻音のことであると窺え、ここにも“*sonsonete*”(ソソソネーテ)の記述が見える。また、(1)(3)とも“*meyo til, ou sonsonete*”とあり、この表現はロドリゲスの濁音前鼻音に対する理解を表したものといえよう。

土井忠生氏の訳版では“*sonsonete*”について、次の通りの解釈を加えている。

ソソソネーテ *Sonsonete* (皮肉な言ひ方などに於ける鼻にかかるやうな抑揚のある発音)
(巻末事項索引 p.15)

ここでは、“*sonsonete*”を「皮肉」な文脈で用いる、「鼻にかかるやうな抑揚」を持つ音とする。この解釈に従うなら、(1)及び(3)の記述は当時の濁音の前に鼻にかかる音声があり、それは皮肉な響きと感じられたものということになる。鼻にかかる発音であるかどうかは、いずれの記述にも「半分の鼻音」と訳される“*meyo til*”とあるから、ひとまず文脈的に問題はなさそうである。一方で、実際にこの音が皮肉のニュアンスを帯びていたかどうかは、問題となる。以下では“*sonsonete*”について、他の先行研究ではどのように定義するか、「皮肉」と「鼻

にかかる抑揚」の二点に注目して確認する。

2-2. “sonsonete” についての諸説

この皮肉の文脈と鼻にかかる抑揚に関して、以下に三説引用する。

橋本進吉(1932:3) : ^マsonsonete (反語をあらはす演説上の調子)

豊島正之(1984:144) : …accent は(sonsonete 同様)単に「音色・響き」を意味するに過ぎず、いわゆる「アクセント」ではない。(同様に sonsonete も「皮肉」や「鼻にかかった…」とは関係ない)

馬場良二(1998:181) : (ロドリゲスは) その運用において「ソソネーテ」は確定的な意味を担っているというよりは、ロドリゲス自身その場その場で「なんとなく耳ざわりな発音、調子」と言いたい場合に使っているらしいことが分かる。

橋本説は土井訳に先行するものである。「反語」とする点で土井訳と近いと思われるが、鼻音性については触れていない。次の豊島説は土井訳にみられた「皮肉」や「鼻にかかった…」という解釈を否定している。ここでは注においてキリシタン・ローマ字資料の内、『サントスの御作業』を例に挙げている。

例えば『サントスの御作業』の「言葉の和らげ」中「言尾」の項に「Sonsonete das palauras」(言葉のニュアンス)とある。対応する本文は 2-65-21「帝王、サンタの…天下無双の美人なる事を見て、邪なる望みを起こされん気色と言尾とを [サンタは] 察し給いて」であり、皮肉等々とは無関係である。(p. 141)

ここでは本文の難語句解である「言葉の和らげ」において、“sonsonete”をもって説明される「言尾」を取り上げ、「言尾」の本文中での用例を元に“sonsonete”の解釈を導く。

最後の馬場説は“sonsonete”を中心に扱ったもので、現代のスペイン語及びポルトガル語辞書を踏まえたうえで、『大文典』にみられる“sonsonete”の用例に対して「なんとなく耳ざわりな発音、調子」という解釈を導いている。また、馬場氏は鼻音性については積極的に否定している^{注1}。

以上、『大文典』のポルトガル語“sonsonete”に対する解釈がみられる三説を挙げた。この語の扱いはそれぞれ微妙に異なるもので、土井訳の解釈と併せても、必ずしも一致した解釈がある訳ではなさそうである。

2-3. 従來說の整理

従来の解釈をみていくと、“sonsonete”は発音に関するものであるという点では一致しているようであるが、この音に対する評価が異なる。これらを整理すると「鼻音性」と「マイナスのニュアンス」のそれぞれを認めるかどうかが焦点となろう。この二点に対する先行研究の態度をまとめると以下の通り。

	鼻音性	マイナス	備考
土井忠生訳	○	○	「皮肉」
橋本進吉(1932)	×	○	「反語」
豊島正之(1984)	×	×	「音色・響き」「ニュアンス」
馬場良二(1998)	×	○	「なんとなく耳ざわりな発音、調子」

“sonsonete” に鼻音性を認めているのは土井忠生訳のみである。マイナスのニュアンスについては「皮肉」、「反語」、「なんとなく耳ざわりな発音、調子」など具体的に指すものはそれぞれ異なるが、土井忠生訳、橋本(1932)、馬場(1998)で触れられている。また豊島(1984)は『サントスの御作業』の用例を元に、この二点に対して積極的に否定したものであった。

以上、先行研究では鼻音性とマイナスのニュアンスのそれぞれを認めるかどうか異なる点を確認した。このような状況を踏まえて、『大文典』にみられる“sonsonete”はどのように解釈すべきか。

2-4. 現代ポルトガル語辞典にみられる“sonsonete”

次に、現代ポルトガル語辞典の“sonsonete”を確認しておく。

馬場良二(1998 : 172)では「ブラジルで出版されているポルトガル語の語源辞典である“DICIONÁRIO ETIMOLÓGICO”を用いて以下のように述べる。

その sonsonete 項には ‘inflexão especial com que se profere uma ironia’ XVI. Do cast. sonsonete 「それによって皮肉を示すところの特別な抑揚；16 世紀、カスティリヤ語の sonsonete を起源とする」とある。

これに従えば“DICIONÁRIO ETIMOLÓGICO”では“sonsonete”に「皮肉“ironia”」といった意味を認め、鼻音性に関する記述はないということになる。

次に比較的大型のポルトガル語—ポルトガル語辞典である“Grande Dicionário Língua Portuguesa”（『ポルトガル語大辞典』）の“sonsonete”（p.1437）の項目には以下のようにある。

inflexão especial de voz quando se profere alguma ironia ou dito malcioso

私訳：ある種の皮肉あるいは悪意のある言葉を発する際の特殊な抑揚

ここでは“sonsonete”に対して「皮肉“ironia”」や「悪意のある言葉“dito malcioso”」といったマイナスのニュアンスがあることを述べており、鼻音性への言及はない。

つまりこれらの辞典では「皮肉」などの意味を込めるものを“sonsonete”とする。また、両辞典とも“inflexão especial”（特殊な抑揚）としている点にも注意するべきであろう。具体的な抑揚の形式には記述がないため、そこに「鼻音」が用いられるかは不明であるが、通常とは異なる抑揚が用いられるということであろう。

なお、主にブラジルで使用されるポルトガル語辞典である、“Dicionário Houaiss da língua portuguesa”^{注2}（『オワイスポルトガル語辞典』、以下“Houaiss”）のオンライン版（内容は第二版にあたる）には次のようにある。

Sonsonete\ê\

Substantive masculine (1595)

1 modo de pronunciar, acento, prosódia

2 (1712) acentuação com que se proferem observações irônicas ou maliciosas

Uso

é possível que esta 2ª acp. seja um emprt. do espanhol (‘tonillo o modo especial en la risa o palabras, que denota desprecio o ironía’); nas abonações portuguesas mais antigas, por exemplo, nos léxicos jesuíticos asiáticos, como o *Dictionarium lusitanicum ac japonicum* (1595), *Vocabulario da lingoa de Japam* (1603), *Prosodia in vocabularium trilingue* (Bento Pereira, 1634) e mesmo na abonação registrada por Bluteau (1712), o sentido que se depreende é o da 1ª acp. aqui referida, não o da 2ª; Rui Barbosa, porém, em *O partido republicano conservador*, usou *sonsonete* no 2º sentido: “o lúgubre sonsonete daquela ironia”, talvez por vivência léxica dicionarística, pois todos os dicionários a partir de Bluteau só referiram essa 2ª acepção

私訳

ソンソネーテ

男性名詞(1595)

1 発音やアクセント、韻律の方法

2 (1712)皮肉や意地の悪さをあらわす音における強調

用例

2の項目はスペイン語からの借用語である可能性がある(「軽蔑や皮肉をあらわす不快な調子あるいは特別な笑いや話し方」)。ポルトガル語として最古の用例は、例えば、アジアイエズス会の辞書、“*Dictionarium lusitanicum ac japonicum*”(ママ。『羅葡日対訳辞書』か)(1595)、“*Vocabulario da lingoa de Japam*”(『日葡辞書』)(1603)、“*Prosodia in vocabularium trilingue*”(Bento Pereira, 1634)及び、Bluteau(1712)の同様の用例、この意味は1の項目で言及したものと考えられ、2ではない。しかし Rui Barbosa は “*O partido republicano conservador*” において2の意味でソンソネーテを使用する: 「陰気なあ皮肉のソンソネーテ」。おそらくは語彙辞書のための存在で、そして Bluteau 以降の辞書では2の意味の用例しかみられない。

“Houaiss” では語釈を二つに分け、キリシタン資料を典拠に挙げる1の語釈には “modo de pronunciar, acento, prosódia” とあり、皮肉や鼻音などには触れない。2の語釈で “irônicas ou maliciosas” とし、皮肉や意地の悪さなどの意味を加えている。これに従えば、キリシタン時代には2の意味がなかったということになるが、2の初例とされるはずの Bluteau(1712)が用例の解説では2ではないとされるなど、記述内容に疑問が残る。

Bluteau(1712) は Rafael Bluteau によって 1712 年から 1728 年にかけて出版された “Vocabulário Portuguez e Latino” (『ポルトガル語・ラテン語辞典』)を指すが、同書で “sonsonete”

の項目を引くと、明らかに2の意味で用いられている。

SONSONETE. (Termo do vulgo.) O tom da voz, que dà a entender a malicia, com que se diz algũa cousa. *Vocis sonu, quo id quod dicitur, depravatur.* (以下略) (巻7 p. 725)

私訳

ソソソネーテ (俗語) それ自身に何かを伴って発せられる、悪意をほのめかす声の調子。
その結果邪悪さを示すための声の響き。(以下略)

“Houaiss” の記述は皮肉性を持たないものと持つものを別項目にするなど、注目すべきものであろうが、その信用性に疑問が残るため、資料としては扱えない。“Houaiss” については参考として挙げるまでとする。

以上から、現代出版されているポルトガル語辞典の内、“DICIONÁRIO ETIMOLÓGICO”、“Grande Dicionário Língua Portuguesa” などでは“sonsonete” が皮肉なニュアンスを含める特殊な抑揚を指すものとして記述している。

2-5. 問題意識

以上では現代の辞典類で、ある程度“sonsonete” について確認が取れた。しかし、十分な信頼性を確保した上で『大文典』の用例を解釈するには、同書に近い環境での、なお詳細な検討が必要であろう。

皮肉の意味や鼻音性などを否定する豊島論文では『サントス』からの用例が示されるが、この用例にも疑問の余地がないわけではない。例えば馬場氏の言うような「なんとなく耳ざわりな発音、調子」という意味であれば、この文脈にも沿うものであろう³。“sonsonete” を文献学的手続きに基づき、より正確に解釈するならば、辞書記述のみによらず、同時代の用例から帰納的に導かなくてはならない。以下では、このような問題意識からキリシタン資料における“sonsonete” の語義について知るため、次の二点の考察を行う。

- ・同時代のキリシタン対訳辞書『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』にみえる“sonsonete” を対訳語彙と対照し、キリシタン資料における基本的な語義を確認する
- ・『日本大文典』で使用される“sonsonete” の文脈について検討する

『大文典』での使用を確認する前に、キリシタン対訳辞書である『羅葡日対訳辞書』及び『日葡辞書』を確認する。これらは対訳辞書という性質上、他言語(ラテン語・日本語)との対照が可能である。そのため、基本的な語義の確認に有利と考える。そのうえで、『大文典』における“sonsonete” の用法をみることで、この語の使用文脈を確認する。なお、馬場良二(1998)では『大文典』独自の用法について言及があった。ここではその点に対する検討も行う。

3. キリシタン対訳辞書の“sonsonete”

以下に、『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』より“sonsonete” の用例を示す。用例の検索にあたっては、Missionary Linguistics Project によって公開される、“Lain Glossaries with vernacular sources” (対訳ラテン語語彙集成) を用いた。

3-1. 『羅葡日対訳辞書』

まず、『羅葡日対訳辞書』(以下『羅葡日』)における“sonsonete”の用例を示す。

- (4) Accentus, us. Lus. Accento, ou sonsonete das palauras. Iap. Cotobano tenifa caigō. (p. 8 右段)
- (5) Prosodia, æ. Lus. Accento, ou sonsonete das palauras. Iap. Cotobano caigō. (p. 649 左段)
- (6) Tenor, ôris. Lus. Accento, ou sonsonete das palauras. Iap. Cotobano caigō. (以下略)
(p. 815 右段)

『羅葡日』では見出し語にラテン語を挙げ、“Lus.”以下にポルトガル語、“Iap”以下に日本語がそれぞれ対訳される。

見出しのラテン語“Accentus”, “Prosodia”, “Tenor”, はそれぞれ、「アクセント」「音調」「抑揚や調子」と言った意味を表す^{注4}。いずれも「アクセント」や「音調」といった、音の響きに関わる語である。なお現段階でこれらを「皮肉」乃至「鼻音」に限定するような例は確認出来ない。

また、ポルトガル語語釈、日本語語釈には共通した表現が取られ、ポルトガル語語釈には“Accento, sonsonete das palauras” (アセント、もしくはことばの sonsonete)、日本語語釈には“Cotobano caigō.” (ことばの開合) とある。

日本語語釈にある“Cotobano caigō.” (ことばの開合) について、『羅葡日』ではこの他二例見られる。

- (7) Pronuntiatio, onis. Lus. Pronunção, e me neos, ou gestos. Iap. Aqiracani monouo yū coto nari, l. moyōuo nasu coto nari, l. cotobano caigō. (p. 644 左段)
- (8) Tonus, i. Lus. Acento, ou tom das palauras. Iap. Cotobano caigō. (以下略)
(p. 828 左段)

見出し語に挙げられたラテン語の内 (7) は「演説」や「発音」を、(8) は「音調」などを意味する^{注5}。やや範囲が広いものの、いずれも発音を指すものといえよう。

また“caigō” (開合) は『日葡辞書』に次のようにあり、漢語の発音に関する術語ではなく、広い意味での発音を指す語であることが分かる。ここでは『邦訳日葡辞書』を引用。

- (9) Caigō. カイガウ (開合) Firaqi auasuru. (開き合はする) すなわち, Cuchino subari, Firogari. (口の窄り, 広がり) 口を開いたり, 閉じたりして発音すること. 『Cuchino caigōga yoi (口の開合が良い) 発音が良い』 (『邦訳日葡辞書』 p. 81)

「口の開合が良い」が「発音が良い」ことを指すことから、当時「開合」が発音をさす語として用いられていたことが窺える。

つまり、“sonsonete”の対訳に用いられる日本語「ことばの開合」は、いわば「ことばの発音」と同義といえよう。これは広く発音を指すのに用いられており、皮肉のようなマイナスの文脈に限定されるものとは考えにくい。そのため、日本語語釈「ことばの開合」がマイナスのニュアンスに用いられるものとは考えにくい。また、このような語彙と対応させられる、ポルトガル語語釈の“Accento, sonsonete das palauras”もマイナスのニュアンスに用いられるも

のとは判断出来ない。そのため、『羅葡日』の用例からは“sonsonete”に対して積極的にマイナスのニュアンスを読みとることは出来ないということになる。また、鼻音性についても、これを読みとることの可能な要素は確認出来ない。

3-2. 『日葡辞書』

次に『日葡辞書』を確認する。同書で確認されたのは以下の6例。

- (10) Asocona. Pron. Aquelle, aquella, ou daquella parte. ¶ Item, Interi. De espanta como Areua, com hum certo sonsonete. (13 丁裏左一右)
- (11) Couasaqi. Som, ou sonsonete da palaura. (60 丁裏左)
- (12) Cuchibiqi. Sonsonete, ou modo de falar, pello qual se entende de hum que consente, ou concede algũa cousa, &c. (62 丁裏左)
- (13) Cuchiburi. i. Cuchibiqi. Modo de falar, ou sonsonete das palauras. (62 丁裏左)
- (14) Töin. Taitö no coye. Voz, ou sonsonete proprio da China. (259 丁裏右)
- (15) Couairo.* ¶ Item, sonsonete, ou toada da voz. (341 丁裏右一補遺)
→Couairo. Metal de voz. (用例略) (60 丁表右)

『日葡』の用例^{註6}の内、(10)は、“Asocona”と言った場合、“Areua”と言うのに対して“certo sonsonete”（一種のソンソネーテ）が伴うとする。両者の発音が具体的にどのようなもので、どのような印象を与えるものであったかについては、確認出来ない。そのため、これについては判断を保留する。

(11)の見出し語の“Couasaqi”は『時代別国語大辞典 室町時代編』（以下『時代別』）を参照すると「能楽で歌い出すときの声の抑揚のとり方をいう」（二巻 p. 1244）とある。用例には『日葡』の他、『花鏡』、『曲付次第』が挙げられており、これら^{註7}を見る限り特にマイナスのニュアンスなどは読みとれない。

(12)の“Cuchibiqi”は『邦訳日葡』では、「人がある事に同意したとか、何かを聞き届けたとかいうことがわかるような、言葉の調子、または、話し方」と訳される。“sonsonete”を用いるのがこのような文脈であれば、「皮肉」などに限定されるものとは考えにくい。

(13)の“Cuchiburi”は『時代別』の「くちぶり [口振]」の項目に「話し手の内心などがうかがわれる、話のし方の様子」（二巻 p. 726）とあり、『日葡』及び『甲陽軍鑑』が用例^{註8}に挙がる。一種のイントネーションを指すものと考えられるが、これも皮肉などに限定されるものとは考えにくい。

(14)の“Töin”は漢字音の「唐音」と見ていいだろう^{註9}。語釈の“sonsonete proprio da china”は直訳すると「中国語固有の sonsonete」となる。ここでの“sonsonete”は「発音」や「音調」などと考えられ、ここに「皮肉」や「嫌な響き」、鼻音性などを積極的に認める理由はないだろう。

(15)は補遺による補足部分に当たる。本編の“Couairo”に“Metal de voz”（声の音色）とあるのに対して、当該項目では“Item, sonsonete, ou toada da voz”（更には、ソンソネーテあるいは声の調子）とある。『時代別』の「こわいろ [声色]」の項目には次の通りにある。

①話すときなどの、その人に特有の声の調子。

②その場面、場面にふさわしい声の調子をいう。(二巻 p. 1223)

ここでは使用場面の差によって分類されているが、基本的には「声の調子」を指すものとみてよい。①の用例には先の『日葡』本編の項目に加え、『玉塵』、幸若舞『烏帽子折』が、②には補遺の用例および『風姿花伝』が挙がる。①②ともに、皮肉や嫌な響きに限定されたものとは考えにくく、いずれの用例もこれらを積極的に認めるべき文脈ではない¹⁰。

以上、『日葡』の用例に検討を加えたが、これらのすべての例に共通してマイナスのニュアンスや鼻音性を見出すことは出来ない。そのため“sonsonete”の基本的な意味にそれらを認めるのは難しいだろう。やはり、先の『羅葡日』と併せて、当該時期における“sonsonete”の基本的な意味は、結果的には豊島(1984)(あるいは“Houaiss”も)と同様に、単なる「音色・響き」と捉えるのが適当ということになる。

4. 『大文典』の“sonsonete”

3節ではキリシタン対訳辞書類による解釈から、“sonsonete”の基本的な意味を確認した。この語は、鼻音性やマイナスのニュアンスといったものを含まずに、語の発音の音色や響きを指すものであった。

次には『大文典』で用いられる“sonsonete”を確認する。当時の辞書に登録されていなくても、実際に使用される用法に偏りが見られる可能性は充分にある。また、馬場良二(1998)では『大文典』での用例を確認した上で、“sonsonete”を「一般的な意味にロドリゲス独自の用い方を加えた用語である」(p. 181)とする。馬場論文では「一般的な意味」に、皮肉などを感じさせる抑揚を認めているため、本稿とは基本的な立場が異なる。しかし、「ロドリゲス独自の用い方」が存在する可能性について、なお検討を要する。

4-1. 記述内容

『大文典』で“sonsonete”が用いられるのは(1)(3)の他に以下の8箇所である。ここでは、土井忠生訳を併せて引用する。

(16) No mesmo sentido vsam do verbo adjectiuo, Tai, por querer, ou desejar, & he modo que mostra muyto pejo, & he propriamente Optatiuo, & no modo de falar tẽ certo sonsonete & modo, que cõ o vso se aprenderà. Vt, Ano quiõ uo conataye toritai. Folgara que me deseyo aquelle liuro. … (以下略) (14 丁裏)

(16) 望み、或いは願ふ意の形容動詞 Tai (たい) も亦同じく命令の意味に使はれるが、これは非常に遠慮した言ひ方であつて、本来は希求法に属する。この言ひ方にはソソネーテを伴った一種の発音法があつて、それは実際の用法に就いて学ばれるだらう。例へば、Ano quiõ uo conataye toritai. (あの経をこなたへ取りたい。) … (以下略) (p.62 「命令法」—「命令法に用ゐられるある言ひ方に就いて」)

(17) Esta particula, Tomo, com opresente, preterito, & futuro do Indicatio tem outro sentido muy vsado na pratica, & de muyta energia que o vso ãsinarà : & tem esta lingoajem : E pois não, que ha que falar nisso ? &c. Attatomo, yũtomo, mairõtomo. E pois não ey de yr, não ha que duuidar ? &c. Tem no modo de pronunciar hũ certo sonsonete que com a obseruancia se aprende. (18 丁裏)

(17)'この助辞 Tomo (とも) は直説法の現在、過去、及び未来に接続して別の意味を示す。それは話しことばで盛んに用いられるものであって、強い力を持ってゐる事は実例を見ればわかる。例へば、Attatomo (有ったとも)、yũtomo (言ふとも) は、葡語の E pois não, que ha que falar nisso? (はい、勿論です、それに就いて何か話すことがありますか。) 等といふのに当り、mairõtomo (参らうとも) は、E pois não ey de yr, não ha que duuidar? (どうして行かない事があらう、行く事は疑ひない。) 等といふのに当る。この言ひ方はある特別なソンソネーテを以て発音するのであって、それは実地に観察する事によって会得される。

(p.79 「日本語及び葡萄牙語に固有な接続法」 — 「未来」)

(18) Agueô made, Agueô madeyo. Este modo de falar se vsa cõ certo sonsonete, & a liagoajem he, Offreceria pois não. No preterito dizemos, Aguetaraba, Agueta madeyo. Offrecebe em bora. (20 丁裏)

(18)'Agueô made (上げうまで)、Agueô madeyo (上げうまでよ) といふ言ひ方をするのには一種のソンソネーテをとる。Offreceria pois não. (確かに上げよう) といふのに当る。過去には Aguetaraba, Agueta madeyo (上げたらば、上げたまでよ) といふ。
(p.90 「許容法、又は、譲歩法」 — 「未来」)

(19) Os do Chũgocu na pronũciaçam excedẽno Firogaru, abrindo demasiadamẽte a boca, da ado certo sonsonete alto. Vt, Narumà, por, Narumai. … (以下略)

(169 丁裏)

(19)' '中国' (Chũgocu) のものは発音する時、'開がる' (Firogaru) 発音を過大にして、口を開き過ぎて一種高いソンソネーテを起す。例へば、Narumai (なるまい) の代りに Narumà (なるまあ) といふ。… (以下略)

(p.608 「卑語」 — 「^マ中国' (CH ũ GOCV)」)

(20) Os deste reyno tambem, fazem o Firogari demasiado, & tem no falar, hum sonsonete muy conhecido, & auilanado. (169 丁裏)

(20)'この国^{註11}のものも '開がり' (Firogari) を過大にする。その言ひ方には、よく知られてゐるが、一種野鄙なソンソネーテがある。(p.608 「卑語」 — 「豊後' (BVNGO)」)

- (21) No Fijen, & em muytas partes deste Ximo, a letra, Y, depois de, A, ou, O, mudam em, E, na pronunciaçam com certo sonsonete muyto roim Vt, Xecai, dizem, Xecae, Yoi, Yoe … (中略) … Curoi, Curoe, &c. De modo que lhe fica como entre dentes.

(170 丁表)

- (21) ‘肥前’ (Fijen)でも、この‘下’ (Ximo) の多くの地方でも、A (ア) か O (オ) かの次の Y (イ) の字は E (エ) に変へて、それを発音するのに甚だしく悪い一種のソソネーテを伴ふ。例へば Xecai (世界) を Xecae (せかえ)、Yoi (良い) を Yoe (よえ) … (中略) … Curoi (黒い) を Curoe (くろえ) といふなど。齒の間にあるかのやうな発音の仕方である。

(p.610「卑語」—「‘肥前’ (FIJEN)、‘肥後’ (FIGO)、‘筑後’ (CHICVGO)」)

- (22) He erro pronunciar muytas palauras Iapoas aportunegadamente a nosso modo com aosso sonsonete, & tambem quando vsamos de alguas palauras Iapoas na pratica portuguesa, fazemos muytas syllabas longas breues, & nos fica habito roim, & pronunciamos depois mal : pello que quando vsaremos de algũas palauras Iapoas no aosso falar, as deuemos pronunciar com seu proprio accenio. Vt, Dizer, Cono mono. por, Cõno mono. Xotocu, Danco, Dobucu, Dojico, Chauana, Concatana, por, Xõtocu, Dancõ, Dõbucu, Dõjucu, Chauan, Cogatana. &c.

(172 丁裏)

- (22) 多くの日本語を発音するのに、われわれの仕方でわれわれのソソネーテを以て葡萄牙語風に発音するのは誤りである。われわれが葡萄牙語で話すのに、その中で或日本語を使ふと、多くの長音節を短くする。それが悪い習慣となつてゐて、その為の間違った発音をする。だから、我々の話の中に或日本語を使ふ場合には、日本語固有のアクセントを以て発音しなければならない。Cõno mono (香の物) の代りに Cono mono (このもの) といふ。Xõtocu (生得), Dancõ (談合), Dõbucu^{註12} (胴服), Dõjucu (同宿), Chauan (茶碗), Cogatana (小刀) などを Xotocu (しょとく), Danco (だんこ), Dobucu (どぶく), Dojico (どじこ), Chauana (ちゃわな), Concatana (こんかたな) といふ。

(p.619「アクセント及び発音上の誤謬」)

- (23) Posto que os Iapoens nam tratem dos accentos desta lingoa no que toca ao falar como esta dito, com tudo no pronunciar tem seu tom, ou sonsonete, ou accentos, & modo de pronunciar natural cõ que distinguem as syllabas, & palauras muy claramente, aßi as equiuocas entre si, como as de mais : o qual sonsonete, ou accento ainda que he vario em Iapam conforme ao vso de varios reynos delle, o proprio, & natural de toda esta lingoa, he o dos cinco reynos do Goquinai, & de Yechijen, Vacasa, Tamba, Võmi, Farima. E todo o sonsonete, ou accento que discrepa do tom, & pronunciaçam do Goquinai, he tido por improprio, ao que os

Iapoens como fica dito chamam, Namari. i. Nam pronunciar bem nem fazer os accentos em seu lugar. Este vocabulo, Namari, declaram aſi : Namaruto yūua, subaru firogaruno foca, cotobano irouiychigayuru coto nari. Tatoyeba, Sumito yū cotouo sumito yū : mata, Faxíuo faxito yū. E por causa deste Namari, os do Miyaco que pronunciam como se deue, muytas vezes nam entendem bem os dos outros reynos que pronunciam Namatte. i. Impropriamente. (173 丁表一裏)

(23) 上述のやうに、日本人はその国語のアクセントに就いて論じながら、談話に關したものは説いてゐない。それにも係らず、発音上にはその音調、又は抑揚、又はアクセントがあり、自然の発音法がある。それによつて音節や語を極めて明瞭に區別し、他の国語と同様に同音異義語を互に區別するのである。その抑揚又はアクセントが、日本ではその色々な国々の用ゐ方によつて違つてゐるが、全国語の中で正しくて自然なのは、‘五畿内’ (Goquinai) の五カ国のと ‘越前’ (Yechijen)、‘若狭’ (Vacasa)、‘丹波’ (Tamba)、‘近江’ (Vómi^{註13})、‘播磨’ (Farima) のとである。‘五畿内’ (Goquinai) の音調や発音と異なつた抑揚、又はアクセントは正しくないとされる。それを前にも述べたやうに、日本人は‘訛り’ (Namari) といふが、それは立派に発音しないで、アクセントをつけるべき所につけないといふ意味である。この‘訛り’ (Namari) といふ語に就いて、次のやうに説かれてゐる。Namaruto yūua, subaru firogaruno foca, cotobano irou iychigayuru cotonari. Tatoyeba, Sumito yū cotouo sumito yū : mata, Faxíuo faxito yū. (訛るといふは、すばるひろがるの外、ことばの色を言ひ違ゆることなり。例へば、Sumi [墨] といふことを sumi といふ、又 Faxí [箸] を faxi といふ。) かかる‘訛り’ (Namari) の為に、発音すべきやうに発音してゐる‘都’ (Miyaco) の人は、‘訛つて’ (Namatte)、即ち間違つて発音する他国のものの言ふことをよくは理解しないことがしばしばある。

(p.622 「日本語の談話の上にあるアクセントに就いて」)

(16) (17) (18) はそれぞれ “Tai”, “Tomo”, “Agueô made” の表現が本来の用法から離れて用いられる場合に、特殊な “sonsonete” が伴うことを述べた記述である。(16) は「本来は希求法に属する」 (he propriamente Optatiuo) “tai” が「命令法」 (OVTRO) の用法として用いる場合について述べたものである。(17) は「助辞 Tomo」が「直説法の現在、過去、及び未来に接続して別の意味を示す」 (com opresente, preterito, & futuro do Indicatiuo tem outro sentido) 場合に言及する。(18) は「許容法・讓歩法」 (MISSIVO・CONCESSIVO) の “agueô madeyo^{註14}” が「確かに上げよう」 (Offreceria pois não) という意味へ変わることを述べている。いずれも、このような時には一種のソソネテ “certo sonsonete” が用いられるとする。

(19) (20) (21) はいずれも「卑語」 (BARBARISMO) の章に属する。ここでの “sonsonete” は中国、豊後、肥前の発音について用いられており、それぞれ、「高い」 (alto)、「野鄙な^{註15}」 (auilanado)、「甚だしく悪い」 (muyto roim) と評される。

(22) は外国人が日本語を発音する際に誤る傾向のある発音について触れたもので、日本語を自分達の “sonsonete” を以つてポルトガル語風に発音することを誤りとする。

(23)は土井忠生訳では「ソンソネーテ」ではなく、「抑揚」と訳されている。ここでは“sonsonete”が“tom”（音調）、“accent”（アクセント）と並列されている。この項目は日本語のアクセントについて述べたもので、これらの位置の違いによって同音異義語を区別することなど^{注16}に言及している。なお、この個所は土井忠生訳本の索引に記載されておらず、馬場良二（1998）でも引用されない。

4-2. 文脈の解釈

以上、『大文典』の“sonsonete”を確認した。類似したものをひろくまとめるなら、①表現内容に変化をもたらすもの((16)(17)(18))、②方言などの発音に言及したもの((19)(20)(21)(23))、の二点であろう。また(22)も発音上の誤りと言う点では、②に類すると言えるだろう。これらから『大文典』独自の用法は読みとれるか。

①のような“sonsonete”について、馬場良二（1998）はここで示される用法がもったいぶったものであると解釈し、「もったいぶった調子」「皮肉っぽい響き」を指すものとしている。しかし、馬場氏は「辞書的意味」として「単調に続いて抑揚がなく、軽蔑や皮肉を示す不愉快な調子」（p. 174）を設定した上で、それに当てはめる形で解釈を導いており、考察過程に疑問が残る。基本的意味として皮肉性などを認めずに、(16)(17)(18)の“sonsonete”を見るなら、イントネーションを広く指すものとして捉える方が穏当ではないだろうか。これは『日葡』((10)(13))にも見受けられるもので、先に設定した基本的意味の域を出るものとはいえず、『大文典』独自の用法とは言えないだろう。

②に関しては、確かに“sonsonete”は印象の悪い地方の音声に関するものに偏って用いられているように見える。一方で、(23)では地方のみではなく、規範的とされる「五畿内」の発音についても用いられているため、その限りではない。

また、濁音前鼻音を“sonsonete”であらわす(1)(3)は中央語について述べたものである。そのため、全て「正しくない」地方の発音を表すのに用いられたとはいえない。また、(2)に注目すると濁音前鼻音のない音を“secamente”とあらわしている。この語は土井訳で「干からびた」とされるが、「無作法に、粗野に」といった意味で捉えるべき語^{注17}である。つまり、濁音前鼻音のない音にマイナスの評価を加えているということになり、ロドリゲスは濁音前鼻音のある発音に規範をおいているといえ、悪い印象を持っていたとは考えにくい。よって、ここでも“sonsonete”が規範的な音声に用いられていることとなり、②の偏りを“sonsonete”の『大文典』独自の用法として解釈することは出来ない。

つまり、『大文典』において“sonsonete”が積極的にマイナスのニュアンスで用いられていると判断する事は出来ない。独自の用法を見出すのは難しいといえよう。

5. 濁音前鼻音と“sonsonete”

ここまで、ロドリゲス『日本大文典』の濁音前鼻音記述に用いられる“sonsonete”に対する解釈を目的として、キリシタン対訳辞書及び『大文典』の内部徴証を手掛かりに考察を行った。これらの考察から、本稿ではキリシタン資料における“sonsonete”に、先行研究や現代辞典で

指摘されることのある、皮肉などのマイナスのニュアンスや鼻音性を認めない。また、『大文典』で使用される“sonsonete”について、独自の用法のようなものも認めない。その上で、この語を単なる「音調」や「抑揚」、「響き」といった意味を指すものと解釈する。

以上を踏まえて、(1) (3)について次のような翻訳案を提示する¹⁸。

(1) *Toda a vogal, antes de, D, Dz, G, sempre se pronuncia como com hum meyo til, ou sonsonete que se forma dentro dos narizes o qual toca algum tanto no til.*

→ D,Dz,G の前のあらゆる母音は常に半分のティルを伴っているように、即ち鼻の中で作られる幾分ティルに近いような響きで発音される。

(3) *Item em lugar de hum meio til, ou sonsonete que requerem algũas palauras como se dira auante no modo de pronunciar, nam se ponha, N, ou til distinto.*

→ 半分のティル、すなわちこの先の発音法の項目で触れるような、いくつかのことばが必要とする響き、この代りに N、つまりはっきりとしたティルに置き換えてはいけない。

ここでは“sonsonete”が多く“accent”のような音調に関する語と関連付けられていた点を強調したい。つまり、“sonsonete”はアクセントやイントネーションのような分節音ではなく超分節領域の音を指す語といえよう。これは(1)の記述から、この音が母音に被さるものとして捉えられていることから窺える。このことは先行研究においても「抑揚」や「調子」とされていることから、特に新しい解釈ではない。しかし、濁音前鼻音がこのような音として捉えられたという点は強調されるべきだろう。

(3)では“sonsonete”であらわされる濁音前鼻音を「N、つまりはっきりとしたティル」「N, ou til distinto」と区別する旨が述べられる。ここでの“N”は“Tonga”“Vareranga”“Nangasaqui”といった挙例から分節音として扱われる。つまり、ロドリゲスの観察では、日本語の撥音と濁音前鼻音の差は、音の領域も異にするものであったということになる。また、ドミニコ会士、D. コリヤードの『さんげろく』において濁音前鼻音はアセント符号“~”をもって表記されており、その表記は義務的ではない(山田昇平(2012)参照)。この点もキリシタンがこの音を超分節的な領域の音と捉えたことを指す例証となろう。(1)(3)の記述は、このような濁音前鼻音の捉え方を直接的に指摘したものといえるだろう。

濁音前鼻音が超分節音として捉えられたという点をどのように評価するかは、今後の課題であるが、日本語の濁音の性質を考える上で、この音の位置づけは重要なポイントとなる。古い時代における濁音自体を超分節的なものであったとする説が先行研究でなされる(かめいたかし(1970)、小松英雄(1971))が、このような議論にとって、濁音の音的な特徴自体が超分節の領域で聞きなされたというのは、一つの貴重な証言といえるのではないだろうか。

6. まとめ

本稿では、ロドリゲス『日本大文典』の濁音前鼻音に関する記述に用いられたポルトガル語、“sonsonete”について考察を加えた。これにより、当該時期の“sonsonete”が従来言及され

る場合があるような、「皮肉性」や「鼻音性」とは関わらないものであることを指摘した。また、この語が“acent” や“tom” などと同列に用いられる、超分節の領域を指すものであることを明確にした。この結果は先行研究で行われる様々な解釈に対して、确实性のある根拠を示した上で、ロドリゲスによる濁音前鼻音の解釈を改めて読み直したということになる。

ロドリゲスの解釈を、日本語の観察としてどのように評価するべきかについては今後の課題だが、日本語史上の濁音を考える上で期待出来るものだろう。

なお、この結果は土井忠生訳の一部に修正を迫ることになるが、これは氏の訳に対する否定的な評価を意図しない。本稿で行った解釈は、氏の訳がなされた時代よりも、資料整理の進んだ段階でなされたものである。氏の訳は高く評価されるべきものであるし、実際に研究史上果たした功績は否定されるべきではない。現段階における研究者がこの成果を利用するために、使用者の時代の研究水準・環境に応じて、研究段階の間に生じたギャップを積極的に補う姿勢が必要であることを示したに過ぎない。

注

注1 馬場（1998：171）「しかしそもそも sonsonete という語はスペイン語起源のものであり、そのスペイン語でも、あるいは、ポルトガル語でも「鼻にかかるような」発音という意味は持たない。」

注2 当該辞書について、石井米雄編（2008：289、執筆著 黒澤直俊）では以下の通りに評価されている。
『オアイス・ポルトガル語辞典』は、ポルトガル版も新たに編集されるなどしてポルトガル語圏で広く用いられている。16世紀以降の語彙を可能なかぎり収録したとされ重宝ではあるが、語源の記述の一部はジョゼ・ペドロ・マシャードの語源辞典（④を参照：原文注）によっており、不正確なところが少なくない。

注3 但し馬場氏はあくまでロドリゲスの独自の用法とする立場を取っており、「サントス」のこの個所にも適用可能と主張しているわけではない。

注4 改訂版『羅和辞典』（研究社 2009）などを参照。

注5 改訂版『羅和辞典』には以下の通りある。

Pronuntiatio：1 公告，宣言。2 判決，宣告。3 【論】命題。4 演説；（俳優の）せりふまわし。5 【文】発音。（p. 524）

Tonus：1 張り，緊張。2 音，響き；音調。3 【音】音階；和声，諧調。4 （音節の）抑揚，アクセント。5 （色の）明暗，色調。6 雷鳴。（p. 670）

*山田注：□ は各分野の用語であることを示す。凡例より【論】論理学 【文】文法 【音】音楽

注6 翻訳版である、『邦訳日葡辞書』の訳を以下に示す。

(10) Asocona. アソコナ（あそこな）代名詞。あれ，または，あそこに。『また，驚きを表す感動詞で，Areua（あれは）に似ているが，幾分滑稽や皮肉などの軽い調子を伴う。（p. 35 左）

(11) Couasaqi. コワサキ（声先）言葉の調子，または，自然でない言葉の調子。（p. 154 右）

(12) Cuchibiqi. クチビキ（口びき）人がある事に同意したとか，何かを聞き届けたとかいうことがわかるような，言葉の調子，または，話し方。（p. 160 左）

(13) Cuchiburi. クチブリ（口ぶり）Cuchibiqi（口びき）に同じ。言葉の調子，あるいは，話しぶり。（p. 160 左）

(14) 'Tōin. タウイン (唐音) Taitō no coye. (大唐の音) シナの独特な音, または, 耳につく語調. (p. 658 左)

(15) † Couairo.* コワイロ (声色) 『また, 自然でない言葉の調子, または, 声の調子. (p. 154 右)

ここでは、“sonsonete” に該当する部分について、「滑稽や皮肉」、「自然でない」、「耳につく」といった訳がなされているものがある。しかしこれらは原文では単に“sonsonete da palaura” (ことばのソソネエテ) のように、“sonsonete” とあるのみで「滑稽や皮肉」や「自然でない」、「耳につく」とあるのは訳者の解釈によるものと思われる。しかし現段階でこれらを積極的に認める根拠はなく、従えない。これは先に見た土井訳や“Grande Dicionário Língua Portuguesa”と同様の内容を持つ辞典類の記述等に基づくものか。

注7 以下には『花鏡』、『曲付次第』から引用する。ここでは「日本思想大系」所収のものを用いた(振り仮名は省略)。

『花鏡』

調子をば機が持つなり。吹物の調子を音取りて、機に合はせずまして、目をふさぎて、息を内へ引きてさて声を出せば、声先、調子の中より出づるなり。 (p. 84)

→謡の発音法について述べたもので、「吹物の調子に併せて声をだせば、声先はその調子から自然と発せられる」といった文脈でとれる。この場合の「声先」は「歌い出し」として問題ない。

『曲付次第』

七五／＼の句を歌い出す文字頭に、同声を置べからず。同声重なれば、重聞也。仮令、去声の声にて文字(を)云出したらば、後句を入声の声先にて色どるべし。 (p. 147)

→これも謡における発音法を述べたもので、「去声に続く句は入声の声先で響きを付けるべし」といった文脈でとれる。この場合の入声の響きには鼻音性は関わらないし、マイナスのニュアンスなども認めるべきではない。

注8 以下には『時代別』に引かれる『甲陽軍鑑』の「くちぶり」を引用する。ただし、『時代別』では『古典資料類聚』所収の元和・寛永刊片仮名付訓十行本を底本に用いるが、ここでは校訂版である『甲陽軍鑑大成』(土井本を底本とする)を用いた。

よき儀をば、ふりてい・みきびき、あるいはくちぶりをもつて、諸人にしられ、 (本編巻十 p. 297)

→「よい事柄を、素振り・みきびき、あるいは口ぶりによって、人々に知られる」といった内容。ここでは「よき儀」を知らせるものの内に「ふりてい」、「みきびき」(語義不明)と共に「くちぶり」が挙がる。これに従えば、「口ぶり」はマイナスのイメージのみを伝えるものではないということになる。

注9 『時代別』:「漢字音の一種で中国の宋代・明代の近代音をつたえたもの」(三巻 p.965) 用例: 広本・易林『節用集』、『運歩』、『日葡』、『壺囊抄三』、『大文典』、『切紙抄』

注10 以下には『玉塵』、『風姿花伝』を引用する。

『玉塵』(国会図書館蔵本を主に用い、比叡本を校合した)

家ノワカイ少年一人アリ。ソレニトモニ老子経ノ事ヲ語タゾ。ソノ少年ナリカトリ、容儀美然トシテ、ケダカイズ。老子ノ事ヲ談スルニコワイロ言便コトバ深ウシテ、ラクフカウ、トライ浅近ニナイズ。夜アケ方ニソコラ礼ヲ云テ、タチ去タゾ。後ニ夜トマツタ所ハ、王弼ガハカデアツタ事ヲ知タリ。王弼ガ物カタリシタゾ。 (巻十一巻三十七 40 丁裏)

→「ワカイ少年」が「老子ノ事ヲ談」じた際の「コワイロ言便コトバ」が深い様を示す。この場面では発話の様が良いことを示す文脈であって、マイナスのニュアンスなどとは関係がない。

『風姿花伝』（「日本思想大系」による。振り仮名は省略）

一、細カナル口伝ニ云ハク。音曲・舞・ハタラキ・振り・風情、コレマタ同心ナリ。コレハイツモノ風情・音曲ナレバ「サヤウニゾアラズラン」ト、人ノ思イ慣レタル所ヲ、サノミニ住セズシテ、心根ニ、同ジ振りナガラ、モトヨリ軽々ト風体ヲタシナミ、イツモノ音曲ナレドモ、ナヲ故実ヲメグラシテ、曲ヲ色ドリ、声色ヲタシナミテ、我ガ心ニモ「今ホドニ執スルコトナシ」ト、大事ニシテコノ態ヲスレバ、見聞ク人、「常ヨリモナヲ面白キ」ナド、批判ニ合フコトアリ。コレハ、見聞ク人ノタメ、メズラシキ心ニアラズヤ。 (p. 57)

→謡に関する心得を述べたもの。「いつもの曲であっても慣例に捕らわれず、常に曲を美しくし、声色を吟味して丁寧に行うべきである」といった文脈であって、ここでの「声色」にもマイナスのニュアンスを認めるべきではないだろう。

注 11 ここでは豊後の国を指す。

注 12 土井訳注「Dōbucu (道服) の誤か。日葡辞書にも Dōbucu の形で載せてある。」

注 13 土井訳注「Vōmi の誤。」

注 14 『大文典』では許容法、譲渡法現在の *Agueô madeyo* を “*Offreça, double que offreça, mas que, l. ainda que offreça.*” (上げよ、上げてかまはぬ、上げても) (原文 22 丁表、土井訳 p. 88) と訳す。

注 15 ただし、原文に即すならこの箇所は「とても有名で、卑しいソソネーテ」となるべきか。

注 16 例として上げている “*sumi*” “*faxi*” はそれぞれ「墨」「隅」「清み」「箸」「端」「橋」といった同音異義語を意図していると思われる。ここでの語が対比させられているかは、現段階でロドリゲスのアセント符号体系を把握していないことから、明らかにし難い。

注 17 “*Grande Dicionário Língua Portuguesa*” に

de modo seco; desabridamente; rudemente (p.1390)

私訳 seco の副詞形；無作法に、粗野に

また、『日葡』に

Aiso. Agasalhado, amor, & affabilidade. ¶ r Aisomo_nai fito. Homem aspero, & de ruins repostas. ¶ Aisomonō yū. Fallar rispida, & secamente. (6 丁表右 ll. 30-33)

とあり、“*secamente*” は “*Aisomonō yū*” 「愛想もの言う」の対訳として用いられている。加えて、“&” で並列される “*rispida*” は「荒々しい」「不快な」「ざらざらする」といった語である。キリシタン資料において、“*secamente*” を同様の「無作法」や「粗野」の意味で捉えて問題ないだろう。

注 18 土井訳との翻訳上の主な差は、「半分の鼻音かソソネーテか…」や「半分の鼻音或いはソソネーテ…」などと訳されていた箇所を「いわば…なソソネーテ」「すなわち…するソソネーテ」とした点である。対象となる原文は “*meio til, ou sonsonete que …*” とある箇所である。“*ou*” を、選択ではなく説明用法として捉え「いわば」や「すなわち」と訳し、関係代名詞 “*que*” 以下の部分は “*sonsonete*” のみにかかるものとした。これはソソネーテ自体に鼻音性がなくと判断したことによる。鼻音性を認める土井訳では “*meio til*” (半分の鼻音) と “*sonsonete*” (ソソネーテ) とを並列させ、“*que*” 以下でこれらの具体的な発音を示す記述と解釈していた。しかし、本稿では鼻音性を認めず、“*meio til*” がどのような “*sonsonete*” (音調) であるかを説明する記述と解釈する。

参考・引用文献

- 石井米雄編 (2008) 『世界のことは・辞書の辞典 ヨーロッパ編』三省堂
- かめいたかし(1970)「かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかったか——をめぐってかたる」『人文科学研究』12 (『亀井孝論文集』吉川弘文館 1984 による)
- 小松英雄(1971)『日本声調史論考』風間書房
- 土井忠生 訳 (1955) 『ロドリゲス 日本大文典』三省堂
- 豊島正之 (1984) 「「開合」に就て」『国語学』136
- 橋本進吉 (1932) 「国語に於ける鼻母音」『方言』2-1 (『国語音韻の研究』岩波書店 1950 による)
- 馬場良二 (1998) 『日本大文典』『日本小文典』に見られるロドリゲスの sonsonete について』『熊本県立大学文学部紀要』4-2 (『ジョアン・ロドリゲスの「エレガント」』風間書房 1993 による)
- 山田昇平 (2012) 「コリヤード著『さんげろく』の“~”」『語文』99 大阪大学国語国文学会

参考・引用テキスト

- J.ロドリゲス『日本大文典』:『ロドリゲス日本大文典』(三省堂 土井忠生訳 1955)、『日本文典』(勉誠社 1976)
- Rafael Bluteau “Vocabulário Portuguez e Latino” (巻 7): Google books による
(http://books.google.co.jp/books?id=3OYPDGOWagUC&dq=Vocabul%C3%A1rio+Portuguez+e+Latino&hl=ja&source=gbs_navlinks_s)
- 『日葡辞書』Oxford 大学 Bodleian Library 蔵本:『日葡辞書』(勉誠社 1973)、『邦訳日葡辞書』(岩波書店 森田武訳 1980)
- 『羅葡日対訳事典』Oxford 大学 Bodleian Library 蔵本:『羅葡日対訳事典』(勉誠社 1979)
- 『サントスの御作業のうち抜書』Oxford 大学 Bodleian Library 蔵本:『サントスの御作業』(勉誠社 1976)
- 『花鏡』:『日本思想大系 24 世阿弥 禅竹』(岩波書店 1974)
- 『曲付次第』:『日本思想大系 24 世阿弥 禅竹』(岩波書店 1974)
- 『甲陽軍鑑』:『甲陽軍鑑大成』本文編 (汲古書院 1994)
- 『玉塵』:国会図書館蔵本—『抄物大系別巻 玉塵抄』(勉誠社 1970)、比叡本—『新抄物資料集成 玉塵』(清文堂 2000)
- 『風姿花伝』:『日本思想大系 24 世阿弥 禅竹』(岩波書店 1974)

参考・引用辞書

- 『現代ポルトガル辞典 改訂版』(白水社 2005)
- “Grande Dicionário Língua Portuguesa” (PORTO EDITORA 2004)
- “Dicionário Houaiss da língua portuguesa” (UOL によるオンライン版: <http://houaiss.uol.com.br/>)
- 『羅和辞典 改訂版』(研究社 2009)
- 『時代別国語大辞典 室町時代編』(三省堂 1985)

データベース

Lain Glossaries with vernacular sources (対訳ラテン語語彙集成): Missionary Linguistics Project (TOYOSHIMA Masayuki.) <http://joao-roiz.jp/LGR/>

付記: ロドリゲス『日本大文典』の検索にあたって、南山大学の丸山徹氏の製作されたテキストデータを氏のお許しの下、使わせて頂いた。記して感謝申し上げます。